

共創福祉

2018年 第12巻 第3号

【研究報告】

山本 二郎

幼児の音楽表現に効果的な童謡のピアノ弾き歌い習得法の提案 1

森 美佐紀, 平工 志穂, 靄本 千種

保育者を目指す学生の食の実態と食育について 9

【実践報告】

藤井 徳子, 山本 二郎, 岡野 宏宣

幼児教育学科における卒業記念創作ミュージカルへの取り組みとその意義 17

富山福祉短期大学

幼児の音楽表現に効果的な童謡のピアノ弾き歌い習得法の提案

山本 二郎

富山福祉短期大学幼児教育学科

(2018.1.31 受稿, 2018.2.28 受理)

要旨

幼児期から美しい音楽を聴き、友達と一緒に歌い、心から音楽を楽しむ経験を積み重ねることで、幼児の感性は豊かに育っていくものと言われている。本論文では、幼児の音楽表現の一つとして童謡を取り上げ、童謡を音楽的に表現するためのピアノ弾き歌いのもつ意義を明らかにするとともに、保育者養成校のピアノ初心者の学生を対象に短期間で演奏力が身に付く方法を提案する。ピアノ初心者にとって弾き歌いは容易なことではないが、技法を習得することにより自らの音楽性や感性を高めることができ、保育者となってから幼児の音楽表現に大きく影響を与えることが期待できる。

キーワード：保育者、童謡、ピアノ弾き歌い

1. はじめに

幼稚園や保育園、子ども園では童謡をはじめとして園歌、讃美歌や仏教の歌などが歌われていて、最近では映画やTVなどからアニメソング、CMソング、ポピュラーソングまでもが取り上げられるようになり、それらは毎年増え続けている。保育者には、日常生活の中でこれらの曲を取り上げ、幼児たちに歌わせ、生活発表会や誕生日会などでは保護者の見守る前でピアノ弾き歌いをするのが求められる。即ち、保育者は、童謡以外に、オフビートなどの複雑なリズムや転調、多彩なハーモニーを用いた新曲をピアノ弾き歌いしながら、幼児たちに指導することになるのである。一方で、保育者をめざす保育士養成校の学生は、保育実習、教育実習、採用試験などで童謡のピアノ弾き歌いが課題となっているため、その技法を学びながら、レパートリーを増やしていかねばならない。このようにピアノ弾き歌い技法は幼児の音楽教育には欠かせないものになっている。

一方で、その保育者をめざす全国の保育者養成校の入学生の大半がピアノ弾き歌いの経験がないということが現状である。本学では入学時の学生の音楽に関する学習状況を把握するために、ピアノ学習経験に関するアンケートを平成16年から毎年実施している。それによれば、「ピアノ初心者」は50%、「幼少時または小学生時に経験」が20%、「高校から始める」が20%、「幼少から現在まで継続」が10%といった割合が、ほとんど変わりなく続いている。また、高校によっては「音楽」が履修科目にないところもあり、楽譜の理

解、読譜能力といった音楽の基礎的知識が身につけていない学生がピアノの経験値に比例して半数を数える。保育・教育現場から求められるピアノの演奏力を初心者にも短期間で習得させることは容易なことではなく、ピアノ指導者にとっても、学習者にとっても大きな課題となっている。

本論文では、幼児の音楽教育、童謡とピアノの弾き歌いの実践例、技法をあげながら、その意義について考察する。

2. 幼児の音楽教育に求められる保育者の指導力

人間の聴覚・音感とは6、7歳で発達の頂点を迎えると言われている。音楽は幼児の感性の発達にとっても大きな影響力を持っており、保育者には、その担い手となって幼児たちから感性を引き出し、豊かな心を育てていくことが望まれる。即ち、保育者は豊かな人間性と音楽性を持ち、幼児たちと音楽の楽しさ、美しさを共感できるように音楽的環境を作りながら、一人ひとりの心の発達を見守っていくことが大切である。保育者に様々な個性があるように、幼児にも持って生まれた個性、能力があり、明るい子もいれば、大人しい子もいる。歌や絵を描くことが得意な子がいれば、その反対の子もいる。保育者は、幼児の個性を温かく包み込み、守る存在にならなくてはならない。そのなかで幼児はのびのびと感性を育てていくものと考えられる。従って、幼児の音楽教育はそのことを忘れて、音楽が施設のPR活動の道具にならないように気をつける必要がある。過去に、数名の音楽が嫌いという学生を指導したこと

があった。嫌いになった原因が、音楽教育を特化した幼稚園において、発表会やイベントのための厳しい音楽指導についていけず、発表会からはずされたことであった。演奏がうまくできなかったことがコンプレックスやトラウマとなり、音楽が嫌いになり、苦手意識を持ったまま入学してきたのである。また、幼児のピアノ教室に通っていて、指導者が怖くてピアノが嫌になり途中でやめたという学生も少なくない。好きで始めたものが嫌いになる。これは保育者や教師がその子どもから大切な感性を奪ったことになり、幼児期の音楽教育に、あってはならないことである。保育者は、幼児の心は繊細で、個性があり、あらゆる能力にも個人差があることを認識して、一人一人の心に寄り添った指導を心がけるべきであろう。そして、高度な演奏を求めるのならば、幼児ができない原因を速やかに判断して方法を示す力と幼児が心から楽しんで取り組めるように導く指導力をもった保育者でなくてはならないと考える。

3. 童謡について

3.1 童謡の魅力

音楽は心を表現したもので、子どもの抱く心の世界を歌にした童謡には詩人、作詞家や作曲家の、子どもへの愛がいっぱい詰まっている。家族や生き物への思いやり、優しさ、友と遊ぶ喜び、美しい自然など、愛らしく、純粋な子どもの感性に訴えかける曲が無数に作られ、世界中で歌われている。なかでも「ちょうちょう」のメロディは、ドイツで作られ、アメリカ、中国、日本へと渡ってきて、それぞれの国で曲名や歌詞を替えて歌われている。ドイツの「幼いハンス」に始まり、アメリカでは「ボートこぎ」としてゆったりと歌われ、中国では「ボートレース」として活発に歌われ、日本では可愛らしい「ちょうちょう」を想って歌われている。「ソミミ ファレレ」の易しいメロディに、子どもたちを魅了する力があることは確かであろう。ほかにも替え歌として親しまれている曲は「むすんでひらいて」「雪のこぼれず」など数多く作られている。このように替え歌が、原曲を作った作曲者の思いから遠く離れていても、子どもたちに喜びを与え、広く受け入れられている理由は、歌詞、言葉よりもメロディ、音楽に魅力があるからではないだろうか。無数に存在する童謡の全てが音楽として魅力的とはいえないが、覚えやすい歌詞、歌いやすいメロディや美しいハーモニーそして楽しさや躍動感を引き出すリズムを有するものが子どもたちから愛され続

けている童謡と言えるだろう。

子どもたちは、日常生活の中や誕生会、発表会で、友達と一緒に歌い、曲の持つイメージを共感し、心を通わせているのである。

3.2 童謡指導の留意点

保育者は幼児の年齢、発達に合わせて童謡を選曲し、歌詞、言葉の意味や情景をイメージさせ、歌わせていくことになる。指導で気をつけることは、まず歌詞、言葉であろう。子どもたちは黒板などにひらがなで書かれた歌詞を読みながら歌うことになる。子どもたちは楽譜が読めないの拍子やリズム、メロディの形はわからない。その上、日本語は欧米の言葉のように強調する、アクセントを付けることは少なく、平淡に歌われやすい。その結果、「どんぐりころころどんぶりこ」の歌詞の「どんぐり」と「どんぶり」が同格になり、のちの記憶にまで影響してくるのである。音楽的には「どんぶりこ」の「ド」にアクセントが必要で、擬音語としても強調されるべきであろう。ただ文字を読むように歌わせるのではなく、拍子感、リズム感、言葉の力を意識させるように導くことが大切である。

記憶の確認のため、毎年、本学学生やオープンキャンパスに参加した高校生に「どんぐりころころ」の歌詞を尋ねている。その結果、「どんぐりころころ どんぐりこ」と答える者がほとんどであった。幼少時に指導した保育者は「どんぶりこ」と歌わせていたはずであるが、言葉としての意識が薄く、成長と共に、語呂が良くて歌いやすい言葉にすりかわっていったと思われる。さらに例をあげれば、「雪」の1番の歌詞「雪やこんこ～枯れ木の残らず花が咲く」は忘れていて、2番の「雪やこんこ～猫はこたつで丸くなる」は覚えているという現象が起こる。これは、子どもの動物好きもあって、情景を想像しやすいため記憶に残っていたと考えられる。そして「かれきのこらずはながさく」は比喩的に歌詞が書かれているため、枯れ木に花が咲き、春が来ると解釈している学生は少なくない。この曲が小学唱歌として作られたことから1番の歌詞のような詩的表現が用いられていたため、幼児にとっては覚え難く、記憶にも影響したことが考えられる。

記憶に残すことが重要ではないが、これらの例から、保育者は子どもたちに、ただ元気に歌わせるだけにならぬよう、言葉の意味を伝え、音楽的に歌わせることを心がけることが大切であろう。それによって曲のイメージが正しく記憶されてい

き、幼児たちの感性あふれる歌声が聞こえてくるようになる。

4. 童謡のピアノ弾き歌いの必要性

童謡はピアノがなくても歌うことはできる。幼児たちは友達と一緒に歌いながら遊んでいる。一人で歌詞やメロディを換えながら歌っている姿も見かける。この光景は幼児の素直な心から生まれた自然な表現といえることができるだろう。その童謡の楽譜には「わらべうた」や「あそびうた」とは異なり、ピアノ伴奏が書かれていて、保育者はピアノを弾きながら幼児に童謡を伝えていくことになる。

また、その童謡の楽譜のことに関して言えば、今日では、ピアノ初級者用の簡易楽譜がたくさん出版されており、これが選択を困難にしている。増えている原因は保育者の演奏の負担を少しでも減らそうというねらいに加え、保育者養成校の学生の大半がピアノ初心者という状況があるからではないかと考えられる。このことを童謡の作曲者はどのように思っているのであろう。ピアノパートは編曲され、オリジナルとは、かけ離れた音が記されている。例えば、芥川也寸志作曲「小鳥のうた」を見比べてみると、はっきりと違いがわかる。ピアノで弾いて聴かせると、幼児たちの耳は美しさを聴き分け、それが歌声に反映されていくことは明確である。但し、音楽的な演奏が条件であることは言うまでもない。この曲のように芸術的な作品ばかりではないが、作曲家は子どもの世界をイメージし、アイデアを駆使し、子どもの感性に響く音楽を作り上げている。確かに難しい曲もあるが、その音楽を保育者の都合で替えていて、果たして音楽は幼児の心に届くのであろうか。保育者のピアノ演奏力や歌唱指導力によって、幼児たちの歌声と音楽性が変わるののはっきりとわかるという話を、施設を訪問する度に、園長から聞かされる。従って、保育者が簡易楽譜を使用する場合でも、オリジナル曲をイメージした音楽的なピアノ演奏と歌唱力や指導力が求められる。「やさしく」、「楽しく」、「はずんで」、「ゆかいに」・・・それぞれの曲のもつイメージを感じ取り、幼児に伝える力を保育者は身に付けなければならない。それ故に豊かな音色やハーモニーによってさまざまな音楽を表現することができるピアノ弾き歌いの技法を習得することが求められる。

5. ピアノ弾き歌い習得法の提案

ピアノは幅広い音域をもち、さまざまな音色を表現できるため、幼児の音楽教育には欠かせないものと言えるが、この特徴が演奏を難しくしているとも言える。ピアノ弾き歌いの演奏には記憶力を中心に、あらゆる感覚、能力が求められる。まず、88鍵の鍵盤を前にして、楽譜を読み（視覚）、10本の指をコントロールしてタッチする（触覚）。音の響きを聴き分け（聴覚）、歌詞（言葉）の意味を理解し、イメージして（想像力）美しい声（歌唱力）で歌うことになる。音はすぐに消えていくため、その演奏を支えているものは記憶力であり、想像力ということになる。現場に出れば、子どもたちに曲のもつイメージを伝えるために、子どもたちの歌う表情や動きを見ながら演奏し、対応していく指導力も求められ、保育者にとってはかなりの技法が課せられることになる。脳科学の研究により、ピアノを幼少から学ぶことにより、脳から左右の手、指への命令回路（神経細胞）が大きくなり、大人になってもスムーズに動かす仕組みができるようになり、その経験がない初心者は神経細胞をこれから大きくしていかなければならない。この差は大きく、一步一步着実に取り組んでいくことが大切になる。即ち、ピアノの練習が習慣化されることによって、記憶力、想像力、集中力が高められ、音楽的な演奏が可能になるものと考えられる。

ピアノ弾き歌いの基本的取り組み方を理解した上で、実際の指導例を挙げながら考察し、特に初心者にとって重要と思われる演奏法を提案する。ここで、ピアノ弾き歌いに大切な要素を以下のように5分類した。

- 1) 読譜（調性・拍子・強弱記号・テンポ等）
- 2) 指使い（正しい運指法）
- 3) リズム（特に付点音符）
- 4) ピアノ奏法の基本（曲のイメージ・タッチ・手指の形等）
- 5) 歌唱力（姿勢・発音・言葉・声量）

5.1 読譜

ピアノを弾く前に必ず楽譜を理解する。調性、拍子、音符のほかに曲のイメージ、強弱記号やテンポの指示などもあるが、特にへ音記号の読譜に慣れることが大切である。

（課題）

初心者の学生はへ音記号に慣れていないため読

譜に手間取る。楽譜によっては伴奏の分散和音の各音程が離れすぎていて、初心者には読み辛い。

(対処法)

童謡の楽譜には、一般的に原曲を弾きやすく編曲した簡易伴奏が用いられていて、右手と左手が2段に分かれて記されている。ト音記号の五線には歌のメロディが記されていて右手で弾かれる。ヘ音記号は左手用に記されていて、初心者はト音記号とヘ音記号が離れて記されているため別ものと勘違いして譜読みに戸惑う。実際は二つの五線の間に一点ハの音があって、音はト音記号から一点ハ音を経由してヘ音記号へと繋がっていることをピアノの鍵盤と照らし合わせて見ることで理解ができる。また、右利きの人の左手は、動かすのみにくい上に、伴奏はメロディに比べて音程が離れているために弾きにくいことが原因で譜読みに手間取るものとする。読譜の習得には、五線紙を用意して、ト音記号のメロディを1オクターブ下げてヘ音記号で書く練習が有効である。

5.2 指使い

読譜のあとは、音符をどの指で弾くのかを決める作業が重要になる。脳から指への命令でピアノを弾いていることを意識して、自然に動きやすい指使いを決めることが大切である。ピアニストは完全に指使いを記憶して演奏しているから、どんなに速いパッセージでも難なく弾くことができる。初心者は右手の指1 2 3 4 5でドレミファソだけを弾く曲、たとえば「ちょうちょう」「ぶんぶんぶん」などから始めると5本の指のコントロールに有効と思われる。また、左手の和音も弾きやすく、伴奏形を変えて演奏もできる。

(課題)

最近是指使いを記した楽譜が多くなってきたが、なかには指の機能に適切でない指使いが記されている楽譜も目にする。初心者にとって5, 4の指は動かし難く、手首や腕に力が入り、リズムが悪くなり、弾き直すことが増える。

(対処法)

一般のピアノ曲に比べて、童謡のメロディはやさしいようで弾き辛いところがある。従って、初心者が指使いを考えることは難しいと思われる。指使いを無視して自己流で弾くと必ずミスを重ね、音楽的な演奏はできない。

正しい運指法は、各指の機能、特徴を理解し、

自然な手の形を保つように考えられているので、無駄な力は入らない上にスムーズに指を動かすことができ、記憶にも役立つ。特に初心者は指導者に教わることを勧めたい。そして、すべての音符の上に指番号を書き、指への意識を強化することが有効である。また、左手のコードや分散和音の指使いも同様に大切である。

5.3 リズム

拍(ビート)によってリズムが、まるで呼吸のように緊張と弛緩を繰り返しながら躍動し、そのエネルギーがさまざまな音楽を生み出している。リズムは音楽の生命ともいえるだろう。ピアノで楽しさや軽やかさ躍動感などを表現するには、奏者のテンポ感、拍子感、リズム感が欠かせない。最近はアニメ音楽やポピュラー音楽などを歌わせたり、楽器で演奏させたりする施設が増えてきており、保育者は子どもたちにシンクレーションやタイ、3連符など複雑なリズムを教えることが必要である。

(課題)

初心者の学生は特に付点のリズムを苦手としていて、曲の流れが重くなり、テンポ感や躍動感を表現することが難しくなる。

(対処法)

童謡には子どもたちが元気に心弾ませる曲が多い。それが付点リズムとなって頻繁に使われている。まずは机の上で、指でリズムをとってみたい、手を叩いたり、両膝を叩いたりして体で覚えることが付点リズムに限らず、あらゆるリズムの習得に有効と思われる。また、頭ではわかっても指でリズムを刻むことが出来ない理由は手首を硬くして鍵盤を押していることがあげられる。軽快に弾んだ曲の1拍目は上に弾むと覚えておくとよい。足首や膝を硬くしてはジャンプもスキップも出来ないのと同じである。手首が硬くなる原因は親指に力が入りやすく、親指と手首は大きく繋がっていて他の4本の指にまで影響を及ぼすため、注意が必要である。

5.4 ピアノ奏法の基本

5.4.1 タッチ・姿勢・手の形について

(課題)

ピアノ初心者は音符を正確に弾くことに気を取られ、曲のもつイメージを考えないで弾いていることが多い。椅子に深く腰掛け、頭を下げて鍵盤

から目を離さないで、腕や手首が固まった状態で弾くため、音楽の流れはかたく、指もスムーズに動かない。

(対処法)

ピアノからさまざまな音色を生み出す指はとても繊細な神経の持ち主である。緊張すると指が震え、汗をかく。感情、心の動きが伝わり易いのが指である。鍵盤に触れる指先と音は一体となって、イメージした音楽を奏でていく。歌と同様に、発音する前にイメージしてタッチすることを心がけておくことが大切である。また、ピアノを弾く前に、楽器のことをよく知っておくことも大切である。ピアノはハンマーが弦を打って音を鳴らす打弦楽器である。88の鍵盤をもつので鍵盤楽器ともいう。「鍵盤の深さは1センチ・重さは50グラム程度・鍵盤の戻りの速度・白鍵と黒鍵の底には段差がある」ということをとタッチした際に感知することができるのと無駄な力が抜けて指を楽に動かすことができる。指を1本1本高く上げて弾いたり、指先が折れるように鍵盤を押しつけて弾いたりしていると手首に力が入り、指が動かなくなるので、手首を柔らかくして、鍵盤の底を意識してタッチすることを心がけると無駄な力が抜けて弾きやすくなる。白鍵盤の底は机上と同じである。

姿勢はまっすぐ前を向いて立っている状態で椅子に浅く腰掛ける。両腕はまっすぐ下におろし、肩から指先まで力を抜いた状態にする。そのときの手と指の形が基本形である。首・肩や肘・手首の力が抜けた状態で手の形を保ったまま、両手の5本の指を鍵盤の底まで落とす。これが姿勢の基本となる。

手の形はとても大切である。手の平で響きを感じるよう、両手の中に柔らかいボールか風船を持っているようにイメージし、1オクターブの音階などを弾く際に親指が手の中に入りやすくする。親指が他の4本の指の下で支えている状態を保つことにより、4本(2345の指)が楽に弾けるようになる。

5.4.2 左手とペダルについて

(課題)

左手で弾く伴奏が特に分散和音の形になると、右手で弾くメロディと合わなくなり伴奏が強弾かれ、メロディとのバランスが悪くなる。また、初心者はペダル使用の経験がない。

(対処法)

童謡の楽譜には歌のメロディは弾かず、両手で伴奏を弾くものもあれば、右手でメロディ、左手がその伴奏をするように書かれたものもある。初心者の場合、後者を使用する。童謡における伴奏はハーモニー(和声)が用いられている。ハーモニーは曲のイメージや進行を決定する要素をもつ。作曲者はハーモニーの上にメロディを書き、後からコード(和音)を色々な形に変えて、曲のイメージを作り上げる。従って、曲に取り組む場合は、楽譜に書かれた通り、コピーするように弾き始めるのではなく、伴奏形(主に分散和音)を原型(コード)に戻して曲の流れを確認してからメロディを参加させると、左手の響きを感じ取りながらメロディを弾くことができ、バランスのよい演奏ができるようになる。初心者にはコードの響きを壊さないように手首の力を抜いて分散和音の練習をすることがよい。また、コードや分散和音に限らず「かえるのうた」「ちょうちょう」のメロディや「音階」などを両手で弾くなどして、左手を自由に動かせるようにしていくことも大切である。

ペダルを使用する場合は、左手と右足を使い、コードの形にして、2つのコードの響きが途切れないようにペダルを踏む練習が必要である。この際、右足首を柔らかくして足の指で軽くペダルを踏んだ状態を保ち、速やかに足先を上げて、すぐに元の位置に戻すという練習が有効と考える。踏むより、上げることを意識して、タッチとのタイミングを見つけることができれば、自然に使用することができるようになる。

5.4.3 右手と歌について

基本的には、右手はメロディを弾き、左手が奏でるハーモニーの響きを感じながら右手で歌うように弾く。弾き歌いの場合には自分の歌声と自分の奏でるピアノの音が同化するように弾くことが重要である。メロディを正しい指使いで正確に弾けるようになった段階で、曲の持つイメージを感じ取って、歌いながら弾く。特にフレーズを意識することで呼吸がタッチと合致し、ピアノで歌うことができるようになる。右手は歌い、語る役目を担うことになる。

(課題)

左手と右手が違う動きをする場合、弾けていた右手が左手に気をとられ、左手と同じ動きをすることが多い。また、その反対もある。

(対処法)

この状態は右脳（左手）と左脳（右手）の命令回路（神経細胞）がぶつかり合って混乱しているところである。これを解決するには決して焦らず、段階を踏むことが近道である。ミスを繰り返すとミスすることを記憶することになり、ストレスになり、音楽を創造する楽しさから遠ざかってしまうのである。

次に示す6段階は、右脳、左脳からの指や声、言葉等への命令回路を強くして記憶を確実にしていく方法の一例である。作曲家が詩を前にして音楽を作っていく過程をイメージして、楽しみながら音楽作りに取り組むことがよい。

以下に習得するための手順を示す。

- ① [右手] 右手だけを使う。メロディを正しい指使いで、曲のイメージを考えて、正確に弾けるようにする。
- ② [右手+歌] 右手で弾きながら歌う。1フレーズずつ歌詞の節目（2、4小節）ごとに止めて息継ぎを確認し、歌詞のイメージを考えて表情豊かに歌う。
- ③ [左手] 左手で伴奏だけを弾く。分散和音の形になっていたなら、和音（コード）に換えて弾く。歌詞に合わせて1フレーズごとに止めて、和音の進行を確認する。左手は簡単な形に編曲されているが、分散和音になると音域が離れているため弾きにくく感じる。和音に換えて手の形を保つと弾きやすくなる。
- ④ [左手+歌] 左手で和音を弾きながら歌う。ハーモニーの響きを感じ取りながら歌う。曲の性格によってはペダルを使ってもよい。
- ⑤ [左手] 左手で楽譜の通りに弾く。ハーモニーの響きを感じ取れるように手首を柔らかくして、決して硬い音にしないこと。
- ⑥ [両手+歌] 両手と歌を合わせる。フレーズを意識して、歌とピアノの音のバランスを聴きながらピアノ弾き歌いをする。

5.5 歌唱力

ピアノを弾きながら歌う場合は歌が主役である。歌声はどの楽器よりも想いを表現することができる。歌詞をはっきりと美しい声で歌い、ピアノはそれを支える。童謡は子どもが歌えるように作られているので、朗読と同じように、詩や歌詞の内容をくみ取り、子どもたちの純粋な心と共感できるように感情をこめて歌うことが大切である。

5.5.1 声量について

(課題)

ピアノ弾き歌いの実技試験では緊張から、ほとんどの学生がピアノを弾くことに気を取られ、声を出すように出せない状態になる。

(対処法)

弾き歌いの場合、腹式呼吸ができる姿勢が大切である。体の重心を意識して、椅子には深く腰掛けしないで椅子の半分位に腰掛け、両足のかかとを地面につける。そして声が遠くに届くように背筋を伸ばして、頭は下げないことを心掛ける。ピアノと歌を合わせる場合は、響きを聴きながら、ゆっくりとしたテンポにする。そして歌は1音の長さを2倍伸ばす母音唱法で歌うと自ずと腹式呼吸ができるようになり、音程を保つことができ、声量も増える。右手は使わずに左手の伴奏に合わせて歌うことも有効と考える。

5.5.2 ピッチ（音の高さ）のコントロール

(課題)

人前で歌った経験がほとんどない場合、ピアノの音に声を合わせるができなくなる。

(対処法)

自信なさそうに小さな声を出すことはできるが、ピアノのピッチからずれている状態の学生はかなりの多い。ピアノに合わせて歌う習慣がないからであろう。この場合の対応で大切なことは、無理矢理、ピアノの音に合わせるのではなく、反対に、その声にピアノの音を少しずつ近づけていくことで、必ずピッチが合う音、ピッチに近い音が見つかる。そこから半音ずつ下げたり、上げたりしていく内に、声とピアノの音が共鳴してきて、耳（聴覚）もそれを感知することができるようになる。

この訓練を繰り返し行うことで、自分の声に自信をもつことができるようになれば上達も早いであろう。特に、男子学生の場合は、低い地声で歌おうとしていたので、オクターブ上を裏声で歌わせたり、小さな声でのハミングを試みたりすることで耳がピアノの音を捉える事ができるようになり、発声に自信をもつようになる。

従って、ピッチが合わないからといって「音痴」と決めつけてはならない。合わせる方法を知らないだけである。これは子どもの場合も同様であると考える。

6. 終わりに

本論文では、幼児たちに童謡を通して音楽の楽しさや美しさなどを伝え、幼児から音楽的表現を引き出すためのピアノの弾き歌いをもつ意義と、保育者に求められるピアノ弾き歌いの技法について考察、提案してきた。

保育者にとって、ピアノ弾き歌いは単なる技術ではなく、曲への想い、幼児への思いやりに包まれた心の表現といえるのではないだろうか。幼児たちは音楽と共に保育者の心を受け取るのである。従って、保育者は日々、技術に支えられた音楽性と自身の感性を磨いていくことが大切である。実際に、本学入学時からピアノを始め、幼稚園に勤めることになり、発表会が近くなると毎年、何曲も用意して研究室を訪ねてくる卒業生がいる。発表会で演奏される曲が年々、難易度が上がり、保育者にも高い表現力が求められている。現場で幼児たちを目の前にすると、保育者としての自覚が生まれ、積極的行動に繋がっていくのであろう。ここに、学生たちに学習意欲を持続させるためのヒントがあると思われる。意欲は技法習得のための前提条件であり、それが継続されなければ何も得ることはできない。学生は指導されるという受け身の状態ばかりではなく、実際に幼児の前で演奏するという能動的な活動が入ることで学習への意識が変わってくるものと考えられる。今後は、提案したピアノ弾き歌い習得法を実践していくとともに、その有効性の評価を行っていく。

参考文献

- 1) 古屋晋一：「ピアニストの脳を科学する」春秋社、2012
- 2) 岸井勇雄、大久保稔：「音楽（音楽リズム）」チャイルド本社、1984
- 3) 井口 太：「新・幼児の音楽教育」朝日出版社、2015

Advocating skills of playing the piano while singing nursery songs Effective to musical expressions of young children

Jiro Yamamoto

Department of Early Childhood Education, Toyama College of Welfare Science

Abstract

It is said to cultivate the sensibilities of the infant to listen to beautiful music, sing nursery songs from the infancy with friends, and play in concert various musical instruments. In this thesis, while the significance of nursery songs as a type of musical expression is discussed and made clear, teaching techniques which will enable the beginner students of piano, who study at a certified childcare worker's training school, to master playing skills in a short period of time. It is not easy for beginner students of piano to play it while singing, but it enables the students to have wider range of musical expressions and sensibilities to master the piano playing skills. Once they become childcare workers they can be expected to have greater influence on the musical expressions of the young children.

Key words : childcare worker, nursery song, piano playing while singing

保育者を目指す学生の食の実態と食育について

森 美佐紀¹⁾, 平工 志穂²⁾, 靄本 千種³⁾

1)富山福祉短期大学 非常勤講師 2)東京女子大学 3)富山福祉短期大学

(2018.1.31 受稿, 2018.2.28 受理)

要旨

近年、保育園や幼稚園の保育の場では、さまざまな食育の取り組みがなされてきている。

食は、生きる力の基礎であり、その重要性は言うまでもない。とりわけ幼児期における食の在り方が、その後の人の生涯にわたる健康の基本ともなる。しかし、社会情勢の変化によって、子どもたちの食を取り巻く現状には多くの問題が生じてきている。核家族化や共働き家庭の増加によって子どもへの食育のためには、子育てをする親世代への支援も必要である。

本稿では、将来保育者を目指す学生に対して、食育に関するアンケート調査を実施した。アンケート調査の内容は、学生自身の食生活の実態と彼らの食育の考え方についてである。

アンケートの結果からは、学生の食生活の問題点や、彼ら自身の求める食育学習についての手がかりが得られた。特徴としては、実践を通じた食育学習や、新たな問題としての食物アレルギーについての関心が見られたことである。次世代の支援指導に当たる保育者養成校の学生には一層の食育学習が必要と考えられる。

キーワード：食育、保育者養成校の学生、食物アレルギー

1. はじめに

2004年に厚生労働省から「保育所における食育に関する指針」¹⁾が示されたこともあり、近年、保育所や幼稚園の保育の場では様々な食育の取り組みが実践されてきている。従来のように生活習慣として食事の指導を行うだけでなく、料理や食物の栽培や収穫など、子どもたちに様々な体験をさせたり、多様な教材を用いた食育の教室が開催されたりすることが増えている。

食は生きる力の基礎であり、その重要性はいうまでもない。しかしながら、近年のさまざまな社会情勢の変化によって、子どもたちの食を取り巻く現状に多くの問題が生じていることも繰り返し指摘されているところである。生活習慣や家族形態の変化によって食生活が便利なものになった一方で、個人の栄養状態に問題が生じたり、家庭や地域の食文化が希薄になったりしてきた。さらに海外からの食物の流入などに伴っては、新たな食の安全の問題が提起されたりしてきた。子どものアレルギーの問題も増加している。

そのような現状の中、「指針」で述べられたような「食を営む力」を養い、生涯にわたる健康の基礎を培うために、今後も保育において食育の重要性が一層増していくものと思われる。幼稚園や保育園において保育者が子どもたちに対して果た

す役割も大きいですが、同時に保育者は子育て支援として、その親の世代へも食育の支援を行うことが期待されており、その役割はさらに大きなものであるといえる。

そこで、保育者養成課程において将来保育者を目指す学生に、彼ら自身の食に関する意識や実態とこれまで受けてきた食育体験、今後の食育に対する意見や考えなどについてアンケート調査を実施した。その結果から、子どもたちに対する食育のあり方とともに、養成校における学生に対する食育教育及び保育者として身につけていくことについても、その内容の方向性が得られるものと考えられる。

2. 方法

学生自身の食生活とこれまで受けてきた食育体験、今後の食育に対する意見や考えを調査するためのアンケートを作成し、大学、短大において保育者養成課程に在籍する1・2年次の学生(19.1 ± 1.5歳)に対してそれを実施した。実施時期は、2015年10月～11月、対象者は149名(男子24名、女子125名)であった。

アンケート実施に際しては、次のように倫理的配慮を行った。調査の目的と意義及び、アンケート結果について数値データは統計的に処理

し、自由記述は個人が特定されないよう配慮して分析することを説明し、同意が得られた学生には同意書に記名してもらい協力をお願いした。

学生に対する食に関するアンケート調査については、これまでおおむね以下のようなものがなされてきている。

多くは学生全般に対する食生活に関する調査である。これには、在籍する学生の食生活の実態を把握し、その結果を今後の学生の指導や健康教育にいかそうとするものが多い。現在は、少子高齢化時代を迎えたわが国の喫緊の課題として生活習慣病を予防するために、幼児期から青少年期にかけての食育が重要視されてきたからである。特に大学生となって自宅を離れ、一人暮らしを始めた学生の食生活について調査し、課題を明らかにして対応を考えたり実践したりするものが目立った。2)、3)、4)、5)

それから保育者養成課程に在籍する学生に対するアンケート調査もなされている。ただしそれらもやはり、学生の食生活の実態を調査しその結果を学生指導と健康教育にいかそうという試みであったり⁶⁾、他専攻の学生との比較調査であったり⁷⁾した。

これらに対して、本稿では、1で述べたように将来、次世代の指導に当たる保育者を目指す学生の食生活の実態とともに、学生がどのような食育に関する知識や技能を習得すべきかの手がかりを得るために、養成課程に在籍する学生に対して、彼ら自身の食生活と食育への考え方についてアンケート調査を実施した。

3. 結果

アンケート調査の結果のうち、まず、保育者を目指す学生の食の実態について報告する。

保育者を目指す学生が三度の食事の中で重視しているものを尋ねたところ、朝食が70名、昼食が21名、夕食が58名であった。朝食を食べているか尋ねたところ、毎日食べる人が82人、大体食べる人が33人、時々食べる人が14人、あまり食べない人が9人、食べない人が12人であった(図1)。間食をとる人は98人であった。間食する人に1日の頻度を尋ねたところ、1回が一番多く59人で、以後回数が増えるごとに人数は減少した。

自分の味覚について尋ねたところ、薄味が17人、普通が101人、濃い味が32人であった(図2)。自分の食べ物について、国産かどうか、国産でも産地を気にするかを尋ねたところ、国産

かどうかだけを意識する人が71人、産地まで意識する人が14人、特に考えない人が65人であった。旬の食材を意識して食べるかを尋ねたところ、積極的に旬のものを食べる人が29人、気がつけば食べる人が94人、気にしない人が27人であった(図3)。

ファーストフードについて印象を尋ねたところ、おいしいと答えた人が39人、便利だとした人が57人、安いとした人が28人、栄養に偏りがあるとした人が17人であった。食事のマナーを意識しているかを尋ねたところ、普段から注意している人が52人、場合によって気を付ける人が91人、あまり気にしない人が5人であった(図4)。美容や健康のために食事制限をしたことがあるか尋ねたところ、現在している人が27人、以前したことがある人が62人、ないという人が60人であった(図5)。

自分で料理をするかを尋ねたところ、毎日する人が11人、よくする人が19人、機会があればする人が82人、あまりしない人が30人、したことがないという人が7人であった(図6)。好き嫌いを尋ねたところ、全くない人が19人、あまりない人が57人、少しある人が51人、かなりある人が22人であった(図7)。

給食についての質問で、給食があった時期については幼稚園・保育園が125人、小学校が142人、中学校が143人であった。給食についてどう思うか尋ねたところ、栄養面でよいというものが最も多く、いろいろな種類が食べられてよいというものが続いた。家庭で行事として実践している食文化を尋ねたところ、お節料理が最も多く、クリスマスが続いた。親の世代と食生活が異なると感じるかを尋ねたところ、感じないと回答の方が多く96人であった。

次に、現在学生が食育で実践していることがあるかないか、食育をいつ受けたのかについても質問をし、それぞれの図8、図9のような結果を得た。それによると、これまで各教育の各課程において、食育を受けてきた学生はかなりの多人数に及ぶにもかかわらず、現在食育を実践している学生はごく少数であることが理解できる。

それから、これからしてみたい食育活動については、表1に示したように、自分自身が食に関する知識を学んだり、料理や栽培などの実践を通して学んだりするものと、子どもたちに食について教えるものの両方の内容が見られた。次世代の子どもたちへの食育のあり方について自由記述を求めた結果、内容については表2に示すように、栄

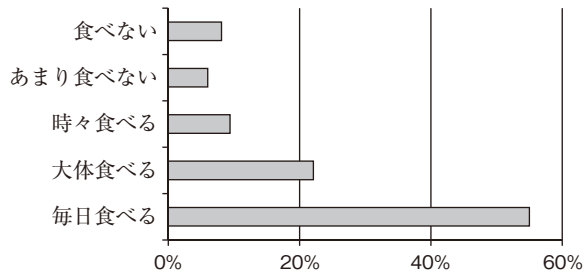


図1 朝食を食べているか

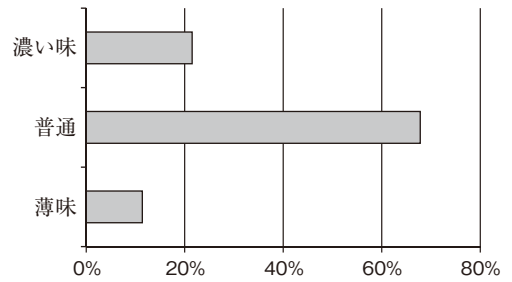


図2 自分の味覚について

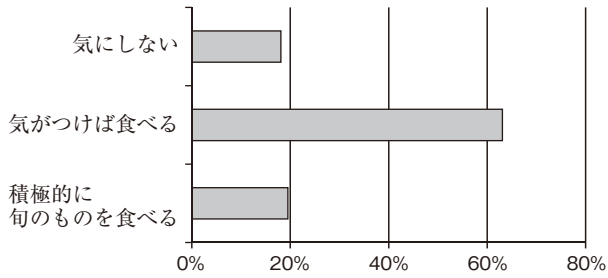


図3 旬の食材を意識するか

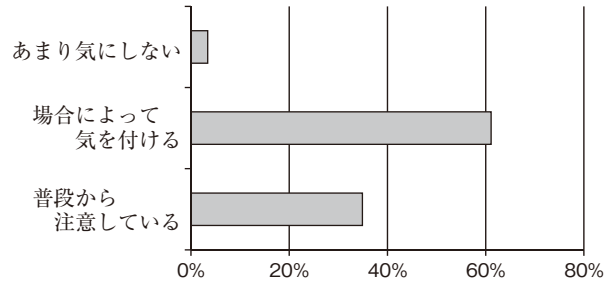


図4 食事のマナーを意識しているか

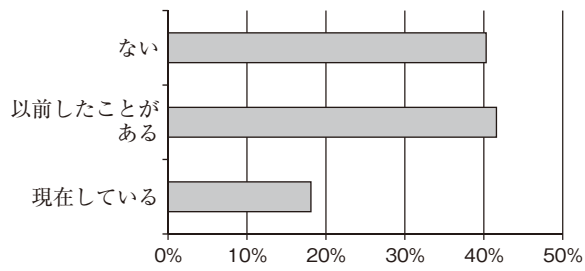


図5 食事制限の経験

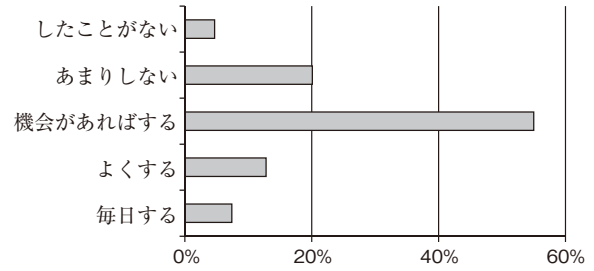


図6 自分で料理をするか

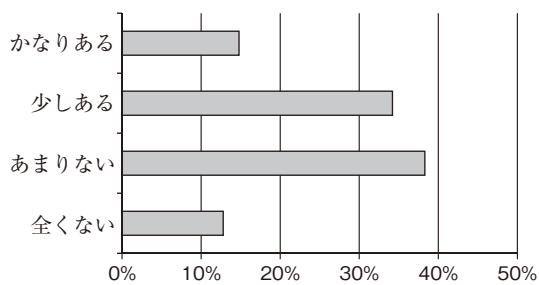


図7 好き嫌いがあるか

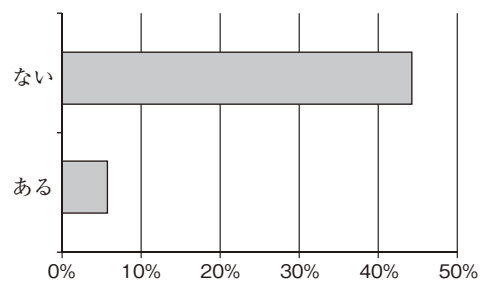


図8 現在食育で実践していることはあるか

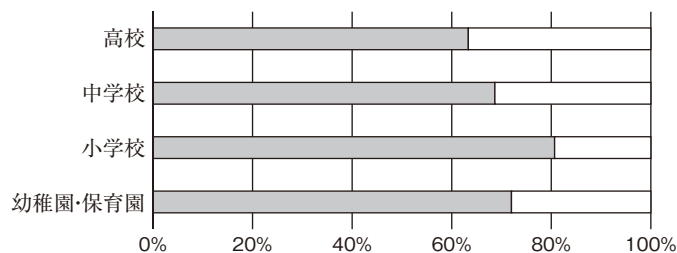


図9 食育を受けたことがあるか

養や好き嫌い、食事のマナー、食物の栽培・収穫・料理の実践、食の安全、地産地消、食文化、

食物アレルギーについてなど、様々な観点について多様な意見が得られた。

表1 これから実践してみたい食育活動

活 動	人数	%
食についての知識を学ぶ	36	50.0
料理を学ぶ	68	94.4
食物を栽培、収穫する	16	22.2
子どもたちに食について教える	35	48.6
その他	1	1.4

※複数回答可。%は実践してみたい食育活動があると答えた回答者数72名に対する割合を示す

表2 次世代の子どもたちへの食育のあり方、次世代の子どもたちにしてみたい食育活動についての考えや意見

自由記述内容	
1	幼い頃から食への興味を持たせ、知識や実践を身に付けてもらえるようにするのが大切だと思います。
2	食育について、家の人や周りの大人と考えたり話したりする時間を設けるといいのかなと思いました。
3	私は、食事はおいしく楽しく食べることが大切だと考えます。そのようなことを次世代の子どもたちにも伝えたい。
4	食べることの楽しさを知ってほしい。
5	子どもたちが楽しくおいしく食事できるような工夫をしたい
6	食べることは、楽しい（お友達、家族とワイワイ）、おいしい（料理にはおいしいものがたくさん）、嬉しい（自分の体にとってとっても大切）ことを伝えたい。
7	ファストフードやコンビニが普及していく中で、子どもたちの食文化や食生活も変化していくと思うが、日本の食文化や旬の食べものを味わうことなど、食べることの楽しさを伝えていきたいと思う。
8	昔からの郷土料理について食育をしてみたいです。
9	地産地消を知らない子がふえている。（知ってもらえるよう積極的に）
10	季節を感じれるものや、食に行事をとり入れたい。
11	好き嫌いを積極的に減らせるような食育があれば良いと思います。
12	最近好き嫌いが多い人が増えてきているので、できるだけなくすように伝えていきたい。あと、箸の持ち方がおかしいので、やればよかったなど今後悔しているので、しっかり教えてあげたいです。
13	食事のマナーはいくつになっても必要。早くから教えても問題ないと思う。
14	はしの持ち方は正しくあるべきだと思う。
15	栄養のある食事を食べて育ってほしいです。
16	加工食品の食べすぎに注意
17	ファストフードは早く安く便利で、近年若い夫婦が増えているのに沿って小さい頃からファストフードの過度摂取が見られるので、ファストフードの栄養の傾りや、成長期に必要なエネルギーをどれほど欠いているかを親に教えるべき。たまには良い。
18	次世代の子どもたちは、たくさんの食べ物に囲まれて育つので、小さいうちからポテトチップスやハンバーガーといった濃い味つけでカロリーの高い食事に触れる機会が多い。だから、小さい頃は、昔のように薄味の食べ物や野菜をたくさん食べるようにするべきだと思う。
19	おかしなどにも最近では体につかたものもでてきているので推めていくべだと思う。
20	・バランスのよい食事がどのように体に影響してくるかを教える。 ・食事のマナーについて教える。
21	著しく身体が成長する時期の食事制限の怖さ（筋肉などの発達のおとろえ…）については教えたい。
22	大学や高校でもたまに給食を食べられる機会があるとよい！
23	栄養のある食材や料理方法についての食育活動をしてみたい
24	できれば、野菜を育てたり、収穫したりなど、口に入るまでの過程を身を持って体験する機会を持ちたい
25	みんなで育てた野菜を使って、一緒に料理して一緒に食べたいです。
26	子どもに野菜を育てる活動をしてみたい
27	野菜嫌いが多いので、実際に野菜を育ててみて、野菜を作る大変さや育てていく過程を観察すると、もっと野菜を食べる大切さが学べると思う。（私も野菜を育ててみて、野菜嫌いがなおった。）
28	栄養のある料理、メニューなどの簡単につくれるものを一緒につくってみたい。
29	自分達で栽培して、収穫した食べ物などを作って、子ども達と一緒に料理をする
30	現代の子どもは、野菜などの作られ方などあまり知らないのではないかと思います。そのため、保育園や幼稚園での栽培・収穫を勧めたいと思います。
31	子どもたちに食べ物のでき方・育ち方などを知ってもらうことは、食べ物のありがたさや大切さを同時に感じる事ができるので良いと思います。
32	料理について学ぶ場がもっと身近にあってほしい。
33	最近アレルギーをもつ子どもが増えているのでみんなでアレルギーについて理解できればよいと思う
34	今アレルギーの子が多いので大変だとも思うし、皆と同じものを楽しみおいしく食べてほしいというおもいと、生命にかかわる問題なのでちゃんとしなくてはいけないというおもいがありますので、大変。
35	私は幼い頃アレルギーが多く、（エビ・カニ・イカ・牛乳・乳製品・卵）が食べられませんでした。それに気づいたのも、遊びに行った時で、ソフトクリームを食べて全身が真っ赤になったからです。今では食べれるようになったものもありますが、食べられないものもあります。それを今アレルギーを持っている子に伝えるべきだと思います。食べたくても、食べられない子達に成長すれば食べられる可能性があることを知ってもらうことが大切だと思います。
36	卵や小麦粉アレルギーの子どもでも食べれるケーキや好き嫌いをなくすためのアイデア料理の講座活動をしてみたい。
37	クラスの全員がその子の持っているアレルギーを知り、クラス全体で気をつける。アレルギー持ちの子どもは、自分のアレルギーをしっかりとあかし、自分から気をつける。
38	今のままでよい。

4. 考察

まず、保育者養成課程に在籍する学生に対するアンケート調査から、学生自身の食の実態が理解できた。特に図1～図7の結果からは、自身の食生活について配慮をしている学生とそうでない学生の両方の実態が示されたと言える。そこで今後乳幼児を支援指導していく者として、自分の食生活に注意を払っていない学生への食育教育の充実が求められる。自分自身の食生活や食への意識が充分でなければ、子どもへの豊かな食育を実践していくことは難しいだろう。具体的には、学生自身が毎日朝食を取ったり、旬の素材をいただいたりすることや、好き嫌いの克服の経験を持ったり薄味の味覚を養ったりする姿勢が、子どもたちへの食育活動にも反映されるものだろう。

食育については、保育者養成課程に在籍する学生はその多くが、高校までの課程で食育を受けた経験を持っていた。そして、今後も自身の食育を実践していきたい学生も多数あるにもかかわらず、現在実践する学生はおよそ1割程度のかんりの少数人数である(図8)。これまでの食育が高校までの授業や活動などを通したものが多いことを考えると、保育者養成課程における食育教育のさらなる充実が求められると思われた。従来の様に食の教育を家庭や地域社会のみが担うという状況は変わりつつあると考えるべきなのかもしれない。保育者養成課程においては、この現状に答える必要があるのであり現在模索されているようにも思われる。

最後に、アンケート調査の自由記述からは、学生の食育への意識や考えなどが理解できた。その内容は多岐にわたっており、学生の食育への多様な興味が示された。

まず、子どもたちに食べることの楽しさを教えたいというものや興味をもってほしいというものがあり(表2の1番～7番)、これは子どもたちへの食育の基本的な姿勢として学生の意欲が感じられた。

それから、子どもの好き嫌いをなくしたり、はしなどのマナーを教えたり、あるいは地産地消や旬の食材を教えたいという意見(表2の8番～14番)からは、子どもたちに希望する具体的な指導内容が見られて、その実践のための学生への支援が求められている。

また最も多かったのは、表2の23番から32番まで見られるように、食物を実際に栽培、収穫したり、調理したりする活動に関するものであった。自分自身で、あるいは子どもたちと一緒に、

実際に食物を栽培、収穫、調理をする必要性を考えたり希望したりしたものが多くみられた。保育者養成課程における実践を含めた食育のあり方が提起されているといえる。食事の前段階の、食物の栽培や収穫の体験は、現在の学生たちに「いのちをいただく」感覚をはぐくむという点でも、有意義なものではないかと考えられる。それは、様々な食物の旬の時期を知ることにもつながるし、収穫後の流通の過程を学ぶことは、食の安全を考えることにもつながるだろう。

また近年増加しているアレルギーについての記述も目立った。(表2の33番～37番)特に自身がアレルギーの体験者であった学生の意見は、アレルギーを持つ幼児と関わる上で有効なものである。

実際、現在幼稚園や保育園では、アレルギーを持つ幼児には給食で代替食を用意したり、除去食を用意したりしている。誤食は乳幼児の健康に直結する事柄であり、近年保育現場では、増加する食物アレルギーに対して多くの努力がなされるようになってきている。保育者を目指す学生は、このようにアレルギーをもつ乳幼児への対応が求められるのであり、表2の35番の意見のように、アレルギー体験者をはじめ、学生の中にみられた食物アレルギーに関する意見は、彼ら自身の今後の学習に発展的につなげられるようにすることが期待される。

5. おわりに

2009年に施行された「保育所保育指針」から、これまでより食育が大きく位置づけられることになった。とりわけ「保育の内容」においては、5つの保育内容のすべての領域で食育の内容が含まれることになったのである。⁹⁾

食はこれまで、重要ではあるが個人に帰属する問題として教育の内容に大きく取り扱われることは少なかった。しかし、現在をはじめに述べたように、社会全体が大きく変化し、少子高齢化時代を迎え、食こそが健やかな人生を最後まで送ることができるための基盤であることが改めて見直されているのである。2005年には食育基本法が施行され、教育機関においても食育の推進が求められるようになったわけであるが、とりわけ健康な心と体の基盤を培うべき乳幼児期において、子どもたちが望ましい食生活を送り食習慣を身に着けることが望まれており、その次世代の支援指導に当たる保育者養成校の学生には一層の食育学習が求められるといえる。

※なお、本研究の「共創福祉」への発表に関しては、富山福祉短期大学の倫理審査委員会で倫理審査を受けている。

参考文献

- 1) 厚生労働省・研究班作成：保育所における食育に関する指針、2004
- 2) 後藤知己、山本寛子、芳川もえみ、吉元愛乃：食育が大学生の食生活に与える効果について、熊本大学教育学部紀要 63巻 pp.287-291、2014
- 3) 澤田由美、木曾田宏美、山本智恵子、塩見和子、丸山純子、三好年江、吉村淳子、岡京子、畑本英子：大学入学生の食生活の様相と健康教育講演会における体験、新見公立大学紀要第 35巻 pp.17-21、2014
- 4) 澤村恭子、木村留美、木村要子、高尾文子、宮脇美幸、塚本幾代、八木典子：一人暮らしの学生の食行動についての検討、広島国際大学総合教育センター紀要創刊号 pp.87-101 2016
- 5) 海山宏之、綾部明江、鶴見三代子、西出弘美、木村美和、長澤ゆかり、山川百合子、岩本浩二、中村勇、佐藤斉、宮口右二、沼口知恵子、山口忍：独り暮らし大学生の食生活行動：茨城大学農学部と茨城県立医療大学の学生協働による地域貢献活動アンケートより、茨城県立医療大学紀要第 21巻 pp.41-49、2016
- 6) 花戸愛子、上地加容子、木村恵子、佐藤泉、杉原麻起、山下まゆ美：短期大学生の食生活の実態と食育への取り組み、奈良佐保短期大学研究紀要第 15号 pp.57-63、2007
- 7) 中島千恵、坂本裕子、浅野美登里、落合利佳：女子短大生の食意識の構造－食に関する知識レベルに着目して－、京都文教短期大学研究紀要第 47集 pp.76-89、2008
- 8) 保育所保育指針、厚生労働省、2009
- 9) 小川雄二、中田典子：五感イキイキ！心と体を育てる食育、新日本出版社、2011

Diet and view on food education of students study about early childhood care and education

Misaki MORI ¹⁾

Shiho HIRAKU ²⁾

Chigusa TSURUMOTO ³⁾

1) *Toyama College of Welfare Science*

2) *Tokyo Woman's Christian University*

3) *Toyama College of Welfare Science*

Abstract

In recent years, various food education activities have been practiced in kindergartens and nursery schools. Needless to say, food habits are important. It is noteworthy that individuals' food habits will affect their physical and mental health in adulthood. But the change of the form of family produced the issue of them. With the rapid increase in nuclear families and double-income families, there is the need to support parents in educating their children about food.

The survey about diet and view on food education of students who belong to a college of early childhood care and education is carried out in this paper. Students will educate children about food habits after graduation.

The survey reveals the problems of their food habits and the contents of food education that they need. Students hope to grow, harvest and cook food by themselves for educating children and study responding to infants having food allergies.

Keywords : food education, students who belong to a college of early childhood care and education, food allergies

幼児教育学科における卒業記念創作ミュージカルへの取り組みとその意義

藤井 徳子, 山本 二郎, 岡野 宏宣

富山福祉短期大学幼児教育学科

(2018.1.31受稿,2018.2.28受理)

要旨

本研究では、本学幼児教育学科における卒業記念創作ミュージカルへの取り組みとその学生への教育的効果について検証する。近年、多くの保育現場や保育者養成校でミュージカルやオペレッタなどの音楽劇を取り入れている。本学幼児教育学科でも2年間の学生生活と学びの集大成として創作ミュージカルを実施している。この創作ミュージカルへの取り組みを通じて、保育士・幼稚園教諭に求められる資質である音楽、造形、身体の総合的な表現力が向上し、さらに学生の人間的成長にも確かな教育的効果のあることが推察された。

キーワード：創作ミュージカル 総合表現 音楽表現 造形表現 人間的成長

1. はじめに

富山福祉短期大学幼児教育学科では、2年間の学生の学びの集大成として、卒業記念発表会創作ミュージカルを行っている。近年多くの幼稚園や保育園で発表会の中にミュージカルやオペレッタなどの音楽劇を取り入れている。ミュージカルは音楽と歌唱が主体となり演技、造形による舞台づくりも含めた総合表現である。特に創作ミュージカルの場合、自分たちが表現したいテーマを中心に台本を作り、劇に仕立て、ストーリーに沿った作詞・作曲・伴奏づけを行い、衣装や舞台道具などもすべて手作りで行うため、まさに総合的な表現力が求められる。保育内容「表現」は、子どもの感性や表現力を育み、創造性の芽生えを培うという観点から設けられた領域であるが、豊かな表現力を身に付けることは、子どもはもちろん保育士を目指す学生にとっても大変重要な資質といえる。

また学生の人間的成長について考えると、創作ミュージカルに取り組むことで、ひとつの目標に向かって協力し、さまざまな葛藤やせめぎ合いを乗り越え、努力の先にある達成感というものを、体験を通して学ぶのである。

本稿では、本学幼児教育学科の2年間の学びの中での創作ミュージカルへの取り組みとその意義について考察する。

2. 創作ミュージカルの実践

幼児教育学科の前身である児童福祉専攻は平成16年に開設された。保育士・幼稚園教諭を目指

し入学してきた学生は2年生になると3回の実習(施設実習、保育実習、教育実習)に就職活動、採用試験などが加わってきて、卒業を前にして、保育者として求められる音楽や造形、身体表現における学生個々の総合的な表現力を把握することが困難になると予想された。

学生たちは、1年次に必修科目「保育内容総論」の授業の中で、地域の保育園児を招待するクリスマス会を開催している。(文献1)クリスマス会の実施を通して、保育行事の企画から準備、実施に至る一連の流れを理解すると同時に、限られた時間の中で自分を追い込み、また仲間と意見が対立しながらも協力して進めていく大変さ、子どもたちを相手にしたときの臨機応変な対応力、それらをやり遂げたときの達成感など、たくさんの学びを体験する。そしてこの体験が、2年次の創作ミュージカルへの取り組みの際の下地となって生きていくと考えられる。(図1)



図1 クリスマス会の様子

保育現場では、ほとんどの園で発表会の中にミュージカルやオペレッタなどの音楽劇を取り入れている。保育者は子どもたちの衣装、小道具作りを援助しながらピアノを担当し、台詞を作り、演技を指導している。そこで、本学では2年間の学生生活と学びの集大成として、卒業記念発表会「創作ミュージカル」の実施を決め、2年の前期から取り組むことにした。ミュージカルは音楽と歌唱が主体となり、演技、造形による舞台作りも含めた総合的な表現力を求められる。学生たちは台本、作曲、大小道具、衣装、舞台作り、演技とすべてを手作りで行い、初めての公演を体験することになるのである。本章では、12年間の公演の変遷と学生たちの授業における取り組みについて述べる。

2.1 目的

創作ミュージカルの目的は以下のとおりである。

- 1) 保育士・幼稚園教諭を目指す学生が2年間の学びを活かし、2年生全員でミュージカルを創作して、地域の保育園や幼稚園の子どもたちを対象とした保育の一環として公演する。
- 2) 台本・作曲・演出・演技・大小道具・衣装・メイク・ポスターと、全て講師の指導のもと学生の手作りで制作していき、音楽、造形、身体の総合的な表現力を習得する。
- 3) 協調性・責任感・統率力・創造性を高める。
- 4) 保育・教育現場での指導に役立てる。

2.2 概要

- 1) 対象：地域の子ども（保育園、幼稚園）、一般親子、保育者、高校生
- 2) 構成：第1回～第5回
第1部は合唱、既成の小ミュージカル、第2部は創作ミュージカルの1回公演。学生は第1部か第2部のどちらかを選択することになる。本学は50名定員であるため1部は20名、2部は30名を目処に振り分ける。
第6回～第13回
創作ミュージカルのための2回公演
- 3) 演目：世界の童話・絵本から選ぶ。合唱曲・既成の小ミュージカルは教員が選び、創作ミュージカル

は学生からの希望をもとに題材を決定する。

- 4) 配役：学生からの希望アンケートをもとに教員が決定する。
- 5) 公演時間：幼児が対象であることを考慮して、約1時間とする。
- 6) 会場：大島絵本館（200席）ステージと客席との一体感を作ることを重要視する。
第8、9回は高周波文化ホール（小ホール）で開催。
- 7) 広報：本学ホームページ（整理券申し込み）、県内保育士養成校、高校、射水市内の保育園・幼稚園・子育て支援センター、本学卒業生

2.3 演目の変遷

本学科の定員数は50名である。この学生数で1回公演のミュージカルを行うとなると、かなりの大掛かりなものになり、全員がキャストを経験できなくなる。そこで1部を約20名による合唱と既成の小ミュージカル、2部を約30名による創作ミュージカルに分けて公演することにした。平成23年、児童福祉専攻としては最後になる年に、創作ミュージカルによる2回公演に変更し、幼児教育学科となってからもこの形で継続している。

第1回（2006年）

- ・合唱「四季のうた」
- ・小ミュージカル「大きなかぶ」
- ・創作ミュージカル「シンデレラ」

本学にとっても学生にとっても初めてになる公演までの道のりは険しいものであった。意欲や歌唱力、演技力などに個人差の大きい学生たちを一つにまとめていくことの難しさを痛感した。しかし、本番が近づくにつれ、チーフのリーダーシップや個々の表現力の向上により、協調性や責任感が学生たちの中に芽生え初め、成功に向けて全員の心が一つになっていった。開演前まで緊張していた学生たちは、開演して会場の子どもたちの喜ぶ姿を見てからは、のびのびと演じるようになっていった。この変化は受動から能動へと心が動いたものと思われる。保育士として、子どもたちに何かを伝えたいという強い思いが生まれたのであろう。終演後、ほとんどの学生が感動の涙を流していた。会場は満席になり、公演は3演目がチームワークよく順調に進行し、無事終了した。

第2回（2007年）

- ・小ミュージカル「てぶくろ」
- ・創作ミュージカル「孫悟空」

この学年は富山新聞主催の「絵本ランド」の依頼を受け、2006年8月に大島絵本館にて創作ミュージカル「かぐや姫」を公演した。2年生は前期から、全員で一つの演目に取り組むことになり規模の大きいミュージカルが完成した。この経験が後期の取り組みに活かされ、意欲や表現力が一層高まっていった。

第3回（2008年）

- ・小ミュージカル「ブレーメンの音楽隊」
- ・創作ミュージカル「ヘンゼルとグレーテル」

この年は小ミュージカルのキャストが増えたために合唱は実施しなかった。

第4回（2009年）

- ・合唱「ジブリ～他」
- ・創作ミュージカル「アラジンと魔法のランプ」

この学年は富山新聞主催の「絵本ランド」の依頼を受け、2008年8月に大島絵本館にてトーンチャイム演奏・合唱・創作ミュージカル「ヘンゼルとグレーテル」を公演した。この経験が2月の公演に生かされることになり同じメンバーによる合唱と創作ミュージカルの構成で実施した。

第5回（2010年）

- ・合唱「ディズニーメドレー」
- ・創作ミュージカル「ピノキオ」

第4回と同様に合唱と創作ミュージカルの構成で実施することになった。

第6回（2011年）

- ・創作ミュージカル「白雪姫」

第1回から5回までは、合唱・小ミュージカルのグループと創作ミュージカルのグループに分かれて別々に練習をしていたため、全員が一つになって作り上げるという本来の目的をなかなか実現できないという状況になっていた。そこで、2011年は児童福祉専攻としては最後の学年になるため、学生たち全員に創作ミュージカルを経験させるべく、今までの1回公演の構成を午前と午後の2回公演に変え、キャストも2グループに分けて開催することにした。AとBの2グループに分け、同じ台本で、Aがキャストの時はBが裏方、Bがキャストの時はAが裏方をするようにして、全員がキャストと裏方を経験することで、お互い

の役割を理解できるようになり、表現力はもとより、協調性、責任感、集中力が高まることとなった。

第7回（2012年）

- ・創作ミュージカル「ピーターパン」

幼児教育学科1期生による公演は児童福祉専攻からの流れを引き継ぐように2グループに分け、午前と午後の2回公演を目指した。A、Bグループは次第に対抗意識を持ち始め、互いに台詞や動きを少しずつ変えて、それぞれの個性を発揮するようになった。演技の練習は夜遅くまで続いていた。この公演から各グループで自主的にアイデアを出し合い、演出を工夫していくようになっていった。

第8回（2013年）

- ・創作ミュージカル「ブレーメンの音楽隊」

第9回（2014年）

- ・創作ミュージカル「オズの魔法使い」（図2）



図2 第9回「オズの魔法使い」

第10回（2015年）

- ・創作ミュージカル「うらしまたろう」（図3）



図3 第10回「うらしまたろう」

第11回 (2016年)

- 創作ミュージカル「あかずきん」(図4)



図4 第11回「あかずきん」

第12回 (2017年)

- 創作ミュージカル「美女と野獣」(図5)



図5 第12回「美女と野獣」

第8回と9回は会場を変更することになったが、公演では学生が新たに考え出した演出が本番で初めて披露されたり、第12回公演では、子どもたちの反応を見ながらのアドリブの演技が続出したりと、学生たちから自発的な行動が見られるようになった。

公演には地域の親子を中心に、2年生の家族、また自分の子どもを連れてくる卒業生も増え、会場は毎回満席となり、卒業記念に相応しい盛り上がりを見せている。本学1年生も翌年公演のために必ず出席して応援することになっている。

2.4 授業における取り組み

ミュージカルは音楽、造形、演技における表現力が求められる総合芸術である。従って、2年生は音楽の授業と放課後の時間を使って準備してい

く。前期に台本作りと作曲を完成させるため、それぞれに5, 6名(希望者含め)を選び、まず台本から作り始め、完成後すぐに作曲に取りかかり、後期が始まるまでに完成させる。台本・作曲以外の学生は通常の音楽の授業を受講する。後期になると全員で演技、歌唱、オーケストラ、大小道具作り、衣装作りと公演に向けて本格的に取り組むことになる。学生は空き時間や放課後を使って、大小道具・衣装を作っていく。オーケストラ(2, 3名)は効果音等を作りながら歌や演技の練習に、常に付き合うことになる。(図6)2年生は2回の実習や就職活動、卒業試験等で大変忙しく、週1回の授業では不十分なため、後期の授業が全て終了して、本番までの約1週間、10時から18時をミュージカルに集中して仕上げる期間とした。そして本番の2日前から公演会場に移り、リハーサルを繰り返し、当日を迎える。こういった一連の流れを第1回から第6回の公演まで続けた。幼児教育学科に変更されてからは、配役決定の参考とするために、2年の前期に台本、作曲の学生以外は、既成の子ども用ミュージカルに取り組み、発表することにした。



図6 練習風景

3. 総合表現としての創作ミュージカルの在り方

ミュージカルなどの舞台芸術は音楽や美術、言語など様々な表現を用いて作られる総合芸術である。本章では、学生による創作ミュージカルという取り組みを保育内容の領域「表現」の視点から捉え、学生自身の学びと体験が、卒業後就職する保育園や幼稚園でどのように活かされるかを考察する。

3.1 音楽表現について

創作ミュージカルの骨格となっているのは音楽表現の分野である。既成のミュージカルと違って、取り組みは作曲から始まり、オーケストラの

音作りと演奏を完成し、その上に歌（独唱・重唱・合唱）を加えていく。

1) 作曲

作曲を任された5, 6名の学生は、音楽の授業で作曲の基礎は学ぶが作曲に関しては、ほぼ初心者である。台本にある歌詞をもとに音楽を作っていく作業は容易ではない。ピアノを弾き歌いしながら書き取り、教員の指導のもと、個々の想いが込められた楽譜が作成されるのである。

2) オーケストラ

メンバーは歌の伴奏や幕間の間奏曲、効果音など多様な演奏が求められるため、ピアノ上級者を含めた2, 3名に委ねられる。音を配分してアンサンブルを作り、効果音などを工夫しながら、練習も本番も最初から最後まで演奏を続け全体を支える。このミュージカルには指揮者はいないため、メンバーには歌手の動きを見ながら呼吸を合わせて演奏したり、幕間の時間に合わせて曲を伸ばしたり、短くしたりと臨機応変の能力が求められる。彼らは公演を通して最も重要な役目を担うことになるのである。(図7)



図7 オーケストラ

3) 歌唱力

歌声は心を伝える最も優れた楽器と言えるだろう。歌手の歌声や曲の美しさで聴衆を魅了するオペラとは異なり、ミュージカルではストーリーは勿論のこと、演技と歌が聴衆を楽しませる面が大きいように思われる。学生たちは普段は童謡を歌っているが、音大生のように声を訓練してはいない。第1回公演のリハーサル会場で学生の声の聴き、その声量の乏しさが明らかになった。演技が出来ても声が聞こえなければ伝わり方も半減する。普段からホールの広さを意識して発声する練習が不足していた。人に伝えるという意識を強く

持つよう指示していたが簡単なことではなかった。第2回公演以降、声楽のグループレッスンを授業に組み入れ、ミュージカルを意識した歌唱力の向上を目指している。

3.2 大道具・小道具制作から学ぶ造形表現について

1) 大道具、小道具の製作の流れ

大道具とは登場人物が手に取ることがない舞台装置を指し、主に背景パネルや建物、樹木、岩石などの書割（板段ボール等に描き、平面的に舞台上に設置する舞台装置）や立体的な舞台装置であり、小道具とは役者が簡単に手に取って持ち運びができるような大きさや重さの舞台で使用されるこまごまとした道具を指している。

約2ヶ月の間に大道具・小道具など舞台装置のデザインから制作まで学生自らが行う。初めの1ヶ月は台本自体が変動することも多く、大道具・小道具も、制作するものの大まかなイメージを持つことから始まる。台本ができあがるにつれ、大道具・小道具で制作するものも明確になってくる。絵を描くことを得意とする学生が中心となって制作するもののイメージ画を描き、大道具・小道具の係でそれらを共有する。二ヶ月目に入り、係内で制作物の責任者が割り当てられ、責任者が中心となり制作を進めていく。舞台の演出が決まるにつれ、大道具・小道具の追加や修正が加えられ、大道具・小道具の係は演者としての練習と並行して制作を行うこととなる。(図8)(図9)(図10)



図8 背景パネル



図9 制作風景



図10 書割

2) 大道具・小道具の役割

子どもたちの遊びに「ごっこ遊び」というものがある。これは人形・おもちゃの動物・積木・草花・木の葉など、何でも使って自由に社会や家庭の模倣遊びをすることである。例えば砂場でおままごとをする場面では、お父さん役、お母さん役、子ども役に分かれ、おもちゃのお茶碗に砂を盛り付けご飯に見立て、お皿に石や葉っぱをのせておかずに見立て、家庭の食事の場面を構成する。お父さん役、お母さん役、子ども役など役割を決めその役になりきり設定された場面を演じる構造はミュージカルと同様である。ごっこ遊びの中の「砂のご飯」や「小石や木の葉のおかず」は実際に口にすることはなく、子どもたちなりの食べる演技が行われる。何も手に持たず演技だけで食事の場面を演じることもあるが、「砂のご飯」や「小石や木の葉のおかず」があることで場面に真実味を与え、子どもたちは設定された場面や与えられた役に没頭することができるのである。ミュージカルにおける大道具・小道具も役者が設定場面に没頭するために必要不可欠な舞台装置で

ある。また、役者だけでなく観客も大道具・小道具があることから場面により臨場感を感じることができる。

3) 創作ミュージカルの大道具・小道具制作を通して学生が学ぶこと

大道具・小道具制作では、どのような背景パネルや樹木等の書割を制作するか、記憶の中の美しい場面を思い出したり、今までに見たことがない風景を想像したりする感性や、イメージした場面を自分なりに作りたい表現したいという気持ちを持ち、場面や使う演者のことを考えて、様々な表現方法や素材を模索する必要がある。創作ミュージカルの大道具・小道具制作を通し、学生は子どもたちへ保育園や幼稚園を卒園するまでに身にさせたい豊かな感性と表現力を体感的に学ぶこととなる。

短期大学を卒業し幼稚園や保育園などに就職すると、子どもたちの生活発表会等で劇の舞台装置を作ったり、クリスマス会や誕生会などで会場の演出を行ったりする必要性が出てくる。実際に大道具や小道具を制作した経験が、保育現場での制作や新しいアイデアの創出につながっていくことだろう。また遊びの場面では、子どもたちに一方的に遊びを教えるだけでなく、ダンボールや木片、ロープなど、子ども達が自ら発想し遊びに展開できるような素材を保育室に置いておいたり、保育者自身が自ら手作りのもので遊びを展開したりすることで、モノに愛着を持ち大切にすることを芽生えさせることにも繋がるだろう。創作ミュージカルで大道具・小道具制作を行うことは、学生自身の成長とともに、保育者として子どもたちの成長に繋がっていくことを意識して取り組む必要があるのである。

3.3 創作ミュージカルを通して得られる「表現」の力

幼稚園教育要領（平成29[2017]年告示）第1章総則第2幼稚園教育において育みたい資質・能力及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の（10）に以下の文章がある。（文献2）

「心を動かす出来事などに触れ感性を働かせる中で、様々な素材の特徴や表現の仕方などに気付き、感じたことや考えたことを自分で表現したり、友達同士で表現する過程を楽しんだりし、表現する喜びを味わい、意欲を持つようにする。」

この「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」とは、幼児の幼稚園修了時の具体的姿であり、保

育者が指導を行う際に考慮するものである。つまり保育者は子どもたちに豊かな感性を発揮させ、何かを表現しようとする意欲と表現力を身に付けられるように指導していかなければいけないのである。そのためには子どもが持つ豊かな感性に気づき、それを受け止められる保育者自身の「感性」も必要である。それは保育者を目指す学生も同様である。また第2章では感性と表現に関する領域「表現」のねらいと内容が以下のように記されている。(文献2)

「ねらい」

- (1) いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- (2) 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- (3) 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

「内容」

- (1) 生活の中で様々な音、形、色、手触り、動きなどに気付いたり、感じたりするなどして楽しむ。
- (2) 生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。
- (3) 様々な出来事の中で、感動したことを伝え合う楽しさを味わう。
- (4) 感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりなどする。
- (5) いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。
- (6) 音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりなどする楽しさを味わう。
- (7) かいたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりなどする。
- (8) 自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりするなどの楽しさを味わう。」(幼稚園教育要領(平成29[2017]年告示))

領域「表現」のねらいと内容は、創作ミュージカルを作り上げていく過程において総合的に組み込まれており、学生は創作ミュージカルを通して領域「表現」のねらいと内容を体感的に身に付けることになる。

4. 教育効果の考察

本学で学んだ学生たちが最後は心を一つにして卒業して行ってほしいとの思いから始まった創作ミュージカルであったが、毎年入れ変わる学生の性格や能力を把握しながら、完成まで導く過程は容易なものではなかった。指導は演技・演出・音楽・舞台・造形に分かれて行い、進行や大小道具・衣装の制作状況の把握はチーフとサブチーフが中心となって行った。ミュージカル経験者はほとんどいない上に、初めて人前で演技をしながら歌うことがプレッシャーになり、消極的な学生の姿がよく見られた。また、週に1回の授業だけでは記憶力、集中力という点で個人差が出て、それが進行を遅らせた。一人でも欠けると他の人の足を引っ張ることになるのがミュージカルである。しかし、緊張感、集中力を壊さないようにチーフやサブチーフが欠席者などの代役を務め、リーダーシップを発揮する光景を何度も見てきた。こうして公演1カ月前になると大小道具、衣装が完成し、自ずと士気が高まってくる。学生によって作成された台本は、練習が始まると叩き台となる。子どもが分かりやすい言葉に換えたり、それぞれの役に性格を持たせ、アドリブを加えたり、演出が変わるたびに変更が加えられ、台詞はまるで生き物のようにキャスト一人一人の中に入っていくことになるのである。このように工夫しながら役を作っていくことが個々の演技への自信に大きく繋がっていくものと考えられる。こうして学生たちは最後まで役作り、演技を競い合い、本番に臨む。そしてステージに立った途端、彼らの不安やプレッシャーは消えてなくなり、客席の子どもたちと一体化していく。そして、笑いあり、涙あり、叫びあり、子どもたちの様々な表情に反応しながらクライマックスを迎え、歓喜の合唱で幕を閉じるのである。今まで味わったことがない緊張から解放された彼らは、達成感、安堵感に包まれた感動の涙を流し、全員が一つになれたことを心から喜び、「もう一度、ミュージカルをしたい」を繰り返すのである。

2年生が卒業記念発表会「創作ミュージカル」に取り組んでから公演を終えるまでの過程を筆者らは毎回見てきた。何もないところから一言、一音、一色ずつ積み重ね、全員の心が込めこめられたミュージカルを完成させるまでに、彼らはどれほど多くのことを学んだことであろう。全員が一つになるためには、音楽、造形、身体の総合的表現力の習得だけでなく、リーダーシップ、責任感、協調の精神の大切さを、身をもって知ること

になるのである。学生たちは、ステージに立つことで、客席の子どもたちとの一体感を感じ取り、見られるから見せる、表現者としての自分が変わっていく。そして、公演を終わった後にやってくる達成感が一人一人の心に大きな感動を呼ぶのである。ミュージカルの成功は、客席がいっぱいになり、公演がミスなく無事に終わることではなく、終わった後の彼らの感動する姿こそが成功を意味するものと言えるのではないだろうか。また、そこに彼らの大きな成長を確認することができるのである。

彼らには、保育者として少しでも多くの感動を体験し、表現することの楽しさ、喜びを子どもたちに伝えていってほしいと期待している。そして、このような表現活動の機会を少しでも多く、学生たちに提供していくことが我々に求められる課題と考えている。

5. 卒業生へのアンケート調査

5.1 アンケート調査

創作ミュージカルに取り組んだ後、保育現場で働いている卒業生7名に、創作ミュージカルへの取り組みが卒業後の自身の保育にどのように役立っているか調べるため、アンケートおよびインタビューを行った。(表1) その主な回答を以下

に示す。

5.2 アンケート調査の結果と考察

項目2「ミュージカルを体験して印象に残っていること」として、「夜遅くまで練習したこと」「自分たちでスケジュールを作って練習を毎日行ったこと」「一人ひとりが自分の役に責任をもって、意見を出し合ったこと」と、取り組みは大変だったけれど、そのことを肯定的に振り返っていることがわかる。また「話し合いがたくさんあったことで、最終的に良いものができた。」「それまで関わりの少なかった友だちとの仲が深まった。」「途中いろいろとトラブルがあったのに、みんな感動して泣いていたのが印象的で、舞台に立つことでみんなが一つになれた気がした」「キャストと裏方が経験できたことで、いろいろなことに気づけるようになった。」と、協調性や責任感の向上を挙げる回答が多かった。

項目3「振り返ってもっとこうしかったこと」として、「大小道具や衣装づくりに時間がかかるので前期から取り組みたかった。」「講師の先生と学生との間で意見が合わず「作り直し」が何度かあった。作る前に、先生方とも具体的に話し合う時間を作ってほしかった。」と、時間の足りなさを挙げている。学生同士や学生と教員間で、コミュニケーションをしっかりとる時間を確保す

表1 卒業生に聞き取りを行ったアンケート

1、出演したミュージカルの演目： 第 回 「 」
2、ミュージカルを体験して印象に残っていることは何ですか？ ・練習について： ・歌唱について： ・大道具や小道具、衣装： ・台本・作曲・オーケストラ： ・舞台に立って：
3、振り返って、もっとこうしかったことは何ですか？ また、こうしてほしかったことは何ですか？（授業、指導等）
4、卒業後、ミュージカルの経験を活かす場面がありましたか？ また、どのような場面で、どのように活かすことができましたか？ ・練習に関する経験： ・演じることにに関する経験： ・歌唱に関する経験： ・大道具や小道具、衣装に関する経験： ・舞台に立つ経験： ・台本・作曲・オーケストラに関する経験：
5、日常の保育業務の中でミュージカルの経験を意識する場面がありますか？ また、どのような場面ですか？
6、舞台に立つ経験から自分自身が変化したことがあれば、それはどのようなことですか？

ること、スケジュールの見通しを共有することが大切である。また、学生の能力、興味関心、参加人数も毎年同じではないため柔軟な運営が求められる。

項目4「卒業後、ミュージカルの経験を活かす場面がありましたか」では、「園の行事や発表会等の立案時。」「子どもたちの前で絵本を読んだり劇を演じたりするとき。」「子どもたちに歌唱指導するとき、歌う楽しさや表現する楽しさを味わえるように努めている。」「子どもたちと一緒に歌うことを楽しめている。」「自信をもって子どもたちの手本として演技している。」「生活発表会での大小道具作りに素早く取り組むことができた。」「ミュージカルのときの舞台道具作りのアイデアを保育中の自由遊びや発表会の劇に取り入れた。」と、いくつも具体的に挙げている。

項目5「日常の保育業務の中でミュージカルの経験を意識する場面はありますか?」には、「月ごとの行事を考える際にいつも意識する。」「子どもの前に立つときに、「はっきりした発音で話そう」「表情豊かに歌おう」と意識できるのは、ミュージカルのおかげだと思っている。」と回答している。

項目6「舞台に立つ経験から自分自身が変わったことがあれば、それはどのようなことですか?」では、すべての学生が「大勢の人前で話す度胸や自信がついた。」「人前で緊張する以上に、「伝えよう」「一緒に楽しもう」と意識できるようになった」ことを挙げている。

以上のように、卒業生たちは、創作ミュージカルへの取り組みが、その後の日々の保育の中でもさまざまな場面で活着しているとしている。そしてそれは保育者として子どもたちへの表現指導だけでなく、自己効力感となって自分自身の表現にも自信を持って取り組めるようになっていくことがわかる。

6. おわりに

幼児教育学科の2年間の学びの集大成である創作ミュージカル公演が13年目を迎えた。平成29年度公演「塔の上のラプンツェル」にも多くの子どもたちや卒業生に観劇していただき、満場の観衆とともに感動のフィナーレを迎えることができた。何も無いところからミュージカルを完成させるまでに、学生たちはさまざまな学びと経験を重ね、音楽、造形、身体の総合的表現力の習得だけでなく、リーダーシップやフォロワーシップ、自主性、協調性、責任感など保育者として大切な

資質や能力にも大きな向上がみられた。そしてこれらは卒業後保育者となったときに、日々の保育の中でますます活着していることも明らかとなり、創作ミュージカルへの取り組みには、ほかには代え難い意義を見出すことができた。保育者を志す学生たちが、多くの感動を体験し、表現することの楽しさ、喜びを子どもたちに伝えていけるよう、今後も様々な課題点を克服しつつ本プログラムを継続していくことが重要である。

参考文献

- 1) 竹田好美 幼児教育学科の参加型授業の取り組み～クリスマス会と演習科目『保育内容総論』の在り方を通して～ 共創福祉第6巻第1号 pp.77-80
- 2) 幼稚園教育要領 平成29年告示

An approach to the program of graduation memorial creative musical and its values in the department of early childhood education

Noriko FUJII, Jiro YAMAMOTO, Takahiro OKANO

*Department of Early Childhood Education,
Toyama College of Welfare Science*

Abstract:

In this study, we address the program of graduation memorial creative musical in the department of early childhood education at our college, and validate the educational effects to the students in the department. In recent years, a number of childcare facilities and childcare training schools adopt musical plays such as musicals and operettas. In our department of early childhood education, we also conduct a graduation memorial creative musical as a grand sum of two-year training and of college life for students. It has been inferred that, through the contribution to the musical, a comprehensive abilities improve among students in their musical, formative and physical expression that are often required to nursery staffs and kindergarten teachers, and furthermore, certain effects exist on the personal growth of students.

Keywords : creative musical, comprehensive expression, musical expression, formative expression, personal growth

『共創福祉』投稿規定

1. 投稿の資格は富山福祉短期大学の教職員に限る。ただし、編集委員会が必要と認めた場合にはこの限りではない。共著の場合、第1著者は原則として投稿資格を持つ者とする。
2. 投稿される論文は未発表のものに限る。ただし、学会において一部発表（投稿）した内容を含むか、学会で発表された複数の論文をまとめたものなどはその限りではない。
3. 論文種別は総説、原著論文、研究報告、実践報告であり、以下のように定義される。
 - 総説：研究や教育についての動向や解説、また評論などについてまとめたもの。
 - 原著論文：一研究としてまとまって終結しており、結論や新たな知見が示されている論文である。また論文内容の一部が学会等で発表（投稿）されていることが望ましい。
 - 研究報告：一研究の過程での部分的なまとまりで、実施方法、評価方法などの提案、また部分的な結果を示す論文である。
 - 実践報告：教育方法の改善や、研究を進める上での改善などに関する報告、また短期的な研究・教育の調査に関する報告などにあたる。
4. 査読は原則として編集委員会が指名した2名の査読者によりなされる。
5. 投稿原稿の採否決定および修正は査読の結果をもとに、編集委員会による審査を経て判断する。
6. 本誌に掲載された論文の著作権は富山福祉短期大学に帰属する。
7. 本規程の改正は編集委員会の議を経て、編集委員長決定により行なわれる。

附則 この規程は平成27年4月1日から施行される。

『共創福祉』執筆要項

1. 原稿はWord、Excel、PowerPointソフトにより作成し、紙媒体と電子媒体を作成する。紙媒体はA4用紙に1行40字・40行とする。論文投稿時は紙媒体のみ、最終原稿提出時は紙媒体と電子媒体を提出する。表・図の挿入位置は、本文の右側の欄外に記入する。
2. 原稿の長さは原則として、本文・表・図を含めて20頁以内、刷り上がり時12頁以内とする。
3. 原著論文は原則として、はじめに（序または研究の背景など）、研究目的、研究方法、結果、考察、結論、謝辞、引用文献の順に構成する。
4. 原稿は以下の順に書くものとする。
 - [第1頁] 標題、所属名、著者名、和文要旨（500字程度）、和文キーワード（8語以内）。
 - [第2頁] 英文で、標題、著者名、所属名、Abstract（450ワード程度）、Keywords（8語以内）。
 - [第3頁以降]
 - 本文：章、節の番号は、第1章に当るものは、“1”、第1章第1節に当るものは、“1.1”というように着ける。また、式番号は、章ごとに（2.1）、（2.2）のようにして、式の左側に統一する。
 - 表：一枚の用紙に一つの表を書く。表の番号は論文中に現れる順に従って、表1、表2、…または、Table 1、Table 2のように書く。
 - 図：図の番号は論文中に現れる順に従って、図1、図2、…または、Fig. 1、Fig. 2、…のように書く。
5. 引用文献の書き方は、本文中で引用する順に、1)、2) というように項番を付ける。
 - 論文、研究報告等の場合
著書名、表題、雑誌名（学会名）、巻、号、ページ（始—終）、発行年（発表年）
 - 雑誌の場合
著書名、表題、雑誌名、巻、号、ページ（始—終）、発行年
 - 単行本などの場合
著書名、書名、出版名、
 - 出版年編集書の中の一部の場合
著者名、標題、編集書名（編集者名）、巻、ページ（始—終）、発行所名、発行年
6. 本文中での引用文献の引用は、文献1)、文献2) のように記述する。
7. 著者校正は原則として一回とする。その際、原著論文は、印刷上の誤り以外の字句や図版の訂正、挿入、削除等は原則として行わない。

投稿論文チェックリスト

* 投稿する前に原稿を点検確認し、原稿を添付して提出して下さい。
 下記項目に従っていない場合は、投稿を受理しないことがあります。

□	1. 原稿の内容はほかの出版物にすでに発表、あるいは投稿されていない。
□	2. 筆頭著者は富山福祉短期大学教職員である。
□	3. 倫理的配慮を要する研究はその内容が記載されている。
□	4. 英文要約はてんさくを受けている。 <u>チェック・機関名</u>
□	5. 論文コピーは3件必要であり、2件には筆者名のないものとする。
□	6. 原稿はWord、Excel、PowerPointソフトにより作成し、紙媒体と電子媒体を作成する。 紙媒体はA4用紙に1行40字・40行である。表・図の挿入位置は、本文の右側の欄外に記入している。
□	7. 原稿の長さは原則として、本文・表・図を含めて20頁以内、刷り上がり時12頁以内である。
□	8. 論文は、はじめに(序または研究の背景など)、研究目的、研究方法、結果、考察、結論、謝辞、引用文献の順に構成している。
□	9. 原稿は以下の順に構成している。 [第1頁] 標題、所属名、著者名、和文要旨(500字以内)、和文キーワード(8語以内)。 [第2頁] 英文で、標題、著者名、所属名、Abstract(450ワード程度)、Keywords(8語以内)。 [第3頁以降] 本文の章、節の番号は、第1章に当るものは、“1.”第1章第1節に当るものは、“1.1” というように付ける。また、式番号は、章ごとに(2.1),(2.2)のようにして、式の左側に統一する。
□	10. 表は一枚の用紙に一つの表を書く。表の番号は論文中に現れる順に従って、表1、表2、 …または、Table 1、Table 2のように書いている。 また、図は論文中に現れる順に従って、図1、図2、…または、Fig. 1、Fig. 2、…の ように書いている。
□	11. 引用文献の書き方は、本文中で引用する順に、1)、2)というように項番を付け以下の ように記述している。 ・論文、研究報告等の場合 著書名、表題、雑誌名(学会名)、巻、号、ページ(始—終)、発行年(発表年) ・雑誌の場合 著書名、表題、雑誌名、巻、号、ページ(始—終)、発行年 ・単行本などの場合 著書名、書名、出版名、 ・出版年編集書の中の一部の場合 著者名、標題、編集書名(編集者名)、巻、ページ(始—終)、発行所名、発行年
□	12. 本文中での引用文献の引用は、文献1)、文献2)のように記述している。

編集委員会

編集委員長 中野 慎夫

編集委員 山本 二郎 竹ノ山 圭二郎 蘭 直美
大永 慶子 稲垣 尚恵

共創福祉2018年 第12巻 第3号
Synergetic Welfare Science

2018年（平成30年）3月30日発行

編集・発行 富山福祉短期大学
〒939-0341 富山県射水市三ヶ579

印刷 (株)タニグチ印刷

Synergetic Welfare Science

Vol.12, No.3, 2018

Contents

Research Report

Advocating skills of playing the piano while singing nursery songs
Effective to musical expressions of young children
..... *Jiro YAMAMOTO* 1

Diet and view on food education of students study about early childhood
care and education
..... *Misaki MORI, Shiho HIRAKU, Chigusa TSURUMOTO* 9

Practice Report

An approach to the program of graduation memorial creative musical and
its values in the department of early childhood education
..... *Noriko FUJII, Jiro YAMAMOTO, Takahiro OKANO* 17